

特別活動におけるカリキュラム編成の基本構想：総合的な学習の時間との連関性

森光, 義昭
近畿大学九州短期大学

<https://doi.org/10.15017/3447>

出版情報：教育経営学研究紀要. 7, pp.65-77, 2004-03-31. 九州大学大学院人間環境学府(教育学部門)
教育経営学研究室
バージョン：
権利関係：

特別活動におけるカリキュラム編成の基本構想 —総合的な学習の時間との連関性—

森 光 義 昭
(九州共立大学)

1. はじめに
2. 新学習指導要領
3. 新しい学力観
4. 総合的な学習の時間
5. 特別活動
6. 学級活動の基本構想
7. 特別活動と総合的な学習の関連
8. 特別活動における学習活動
9. 学習の取り組みとしての評価
10. 総合的な学習の時間の実践上の課題
11. まとめ

1. はじめに

最近のように社会の構造が複雑になると、学校のみでは教育の機能を果たすことは困難である。このような変化の激しい社会を生きていくためには、社会に適応できる力が必要になってくる。それが「生きる力」であり、それを学ぶ場所が学校である。しかし、本来の学校は家庭や地域社会と関連しながら、その中心的な存在として、意図的・計画的に教育の改善を図っていかなければならない所である。そのためには教材として何を生徒のために準備しなければならないかということになる。学校教育は、児童・生徒の発達を援助する営みであるという前提で、生徒の学習や生活のゆとりを確保し、ゆとりの中で生きる力を育むことが重要である。児童・生徒はこれからの時代を拓く人材である。したがって、これからの教育は児童・生徒たちが自ら将来に向かって、自己実現を図るために、社会を生きていくために必要な資質や能力を身につけていくことが求められる。そこに特別活動と総合的な学習の時間の関連をはかっただカリキュラムの編成が重要になってくる。

そこで、本論文では教師の主体的な教育課程の編成にあたって、特別活動と総合的な学習の時間の関連を図ったカリキュラム編成上の一つの考え方を論述する。

2. 総合的な学習の時間

(1) 総合的な学習の時間の趣旨

国際教育到達度評価学会は研究調査の結果を次のように発表している。一つは理科の学力は高いが「好きな教科ではない」、「生活に生かす」ことを意識していないということが挙げられているが、このことがこれまでの学習指導の問題点であったと考えられる。二つは子供の自己評価や自尊感情が低い、規範意識の衰退、社会的価値の獲得の欠如をあげている。これを受けて、新学習指導要領が示されたが、世論や教育現場では教科内容の削減に伴う授業時数を問題にしたり、どのようにすれば新学習指導要領をこなすことができるかという操作的な判断が先に立って、教育観や指導観を変えることにはいささかの抵抗感があるようである。また、この2つの結果を同時に子供が獲得することは難しい問題で

あるという考えもある。しかし、学習課題を自己の生活の場面である家庭や地域から創り出すことから出発すれば自然と「生活に生かす」ことや「社会に対する見方や考え方」が養われるはずである。この両者を総合的に獲得しようとしているのが「総合的な学習の時間」である。

従来の学校教育は学習指導要領や教科書に基づいて教育課程を編成してきた。今回、特色ある学校づくりを目指して、学習指導要領そのものが学校に特色あるカリキュラムづくりを求めている。そこに、「総合的な学習の時間」の意義があり活用が求められる。また、特色とは他の学校とまったく異なる教育をすることでもないし、学校の特色を最初から考えて実施するということでもない。むしろ、学校の創意・工夫によって特色ある教育を進めることを意味している。つまり、おらが学校の教育課程をマネジメントするということである。

総合的な学習の時間の実施にあたって、学習指導要領では次のように示している。①各教科を総合的・横断的に捉え、教科の枠にとらわれない新しい発想での領域をつくり出すこと、②そのためには、指導の内容や方法については規制しない、③文部科学省版解説書はつくりたくない、④教科書は使用しない。⑤教師用指導書はないなど、先進的な学校の実践などを参考にしながら、自校のカリキュラムを作成する。このような主旨のもとに平成14年度からカリキュラムが作成され実践されている。

(2) 教育課程の基準の改定の「ねらい」をどう読むか

最近の社会の動きに目を向けてみると、企業では個別対応の教育が重視されている。以前は画一化して大量生産し、安く売ればユーザーは満足していたが、最近では自分の趣味を生かしたいとするユーザーへの対応に向けて生産が個別化され、そのため顧客の注文に応じる製品製作をしている。また、その製品に顧客が参加して相互交流をするパターンを取っている。それは顧客の趣向に合致しなければ、その顧客は企業から離れていったり、

顧客を新たに獲得することは困難であるから、今いる顧客を離さないように努力することに力を注いでいる。そこで、このことは学校という教育現場でも、企業と似ていることがわかる。つまり、学校や教師が企業であり、顧客が児童・生徒である。しかし、今までは学校は顧客獲得の努力をしなくてよかった。子どもを教科書とチョークで指導すればよかった。子どもの主体の学習を進めることよりも授業の進度をこなせばよかった。しかし、今は社会の様子が変わっている。これからの学校経営の基本を「個別対応」に焦点をあてることによって、教師の子どもへの対応を変えていかなければならない。その意味で顧客（児童・生徒）獲得のためには個別対応への創意工夫が求められる。

そこで、平成10年に教育課程の基準の改訂が行われた。ここで、教育理念を提示することによって、学校管理者の基本的な姿勢を確立することをねらっている。その中で、①時代の流れを考え、近未来の見通しを持つ、②幅広い情報から教育や学校の現状をリアルに把握する、③両者の関連で、学校経営の理念を絞り込み実践化を図ることをねらっている。また、教育課程改善のねらいは、第一は「豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること」、第二は「自ら学び、自ら考える力を育成すること」、第三は「ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実すること」であるが、この3つのねらいは全て「個」に通じるものであり、子ども一人一人が「自己確立」できることを意味している。また、各学校自身が他の学校とは異なった経営の重要性を語りかけている。そのことが教育課程の基準の改訂の第四に取り上げてある、「各学校の創意工夫を生かし特色ある教育、特色ある学校づくりを進めること」に通じることになる。

(3) 教育課程の自主的編成

今回示された教育課程の改善の大きな柱である教育課程の横断的・弾力的運用は、各学校で教育課程の自主的編成を示すものであり、カリキュラムマネジメントは校長のリー

ダーシップのもと、教師一人一人に求められることになる。教育の現場では「総合的な学習の時間」の導入により、にわかに、「総合的な学習の時間のカリキュラムを何とかしないと」という動きが出始めた。「総合的な学習の時間」は一つの教科ではない。全く新しい教育活動の時間である。ところが、当初学校現場では、この「総合的な学習の時間」を単なる一つの教科が増設されたものであると捉える傾向が強くはたらいた。この「総合的な学習の時間」は学校の特色を生かし、新たな学校を創造していくためのものである。つまり、学校経営の基本理念そのものである。したがって、これは各教科、道徳、特別活動を総括したものであるとして連関性^①を持たせ、位置付けた上で、カリキュラムを作成していかなければならない。そのためには全教職員が共通理解の上に立つて行う協働性^②が保たれ、当たらなければならない。そこに校長としてのリーダーシップが問われることになる。

各学校には長い間に積み重ねられてきた歴史の上に立って人々（児童・生徒、教職員、保護者、地域人、その他）の生き様が刻み込まれている。それが学校文化であり、その姿は学校の数だけ存在している。そこで、各学校の特色を生かしながら、各学校の歴史や文化、児童・生徒の実態、校長の経営理念・教職員の教育理念、地域のヒト・モノ・コトを生かしながら学校独自のカリキュラムをマネジメントしなければならない。

3. 新しい学力観

(1) 従来からの学習活動に対する課題

従来から行われてきた、わが国の学習指導を国際比較の方向から考えてみたい。国際学力比較調査結果では、小学生・中学生共、数学や理科の知的学力（いわゆる知識）は上位群に位置している。しかし、理科が好きという割合は小学生の場合は中位、中学校は最下位であり、知的学力と興味・関心の関係は同じではない。これは、知識が必ずしも、興味・関心とは一致しないことを意味している。また、知識は同じように創造する力とも関係がなく、生活に応用することができるまでの

学力となっていない。その背景にあるのは、これまでの学習指導は教育の目標や学習の成果をペーパーテストのみによって測定してきた所にある。従来からの教育では得られた知識が自分の生き方とどの様な関わりがあるか、どのように活用していけばよいかという観点では考えてこなかった。学習する課題も一方的に学校や教師が準備したものを効率よく伝授するというスタイルで行われてきた。子供の課題に対する興味・関心とは無縁のところでは活動が進められ、学習に対する自発性や発展性を育てる機会が与えられていない教育であった。それにより、獲得された学力は家庭生活や社会生活と結び付いていかない学力となっていた。その点、総合的な学習の時間は「自ら」ということが基本理念であるので、これからの教育は自分の生き方を見つめながら、社会へ目を向けることができる力が育成されるであらう。

(2) 総合的な学習の時間と学力の関係

わが国における戦後の教育は一斉画一的な学習指導の方法で教育上大きな成果を収めてきた。確かにこの方法は知識の伝達という面からは最も効率のよい最善の指導方法であるとして長い間続けられてきた。国際教育到達度評価学会の報告にあるように、その点では高い水準を維持することができたのだろう。しかし、近年になって真の学力はこのようなペーパーテストによる高得点のみで測れるものであろうかとする考えが現れ始めた。平成14年度から実施されている「総合的な学習の時間」は従来からの教育の反省に立って実施されているものであろう。ところがこの「総合的な学習の時間」によって学力が低下するのではないかということが随所で指摘されている。この指摘は、従来からの教育を全面的に否定した上で、「総合的な学習の時間」に対する偏った捉え方をしているからなのであろう。言うまでもなく、今まで同様、基礎・基本としての学力は各教科学習において身に付けないと「総合的な学習の時間」には取り組めない。したがって従来から行われてきた学習を基盤にしながらの学習であり、学力の低下には結び付かない。また、もう一つこれ

からの教育で、「学力」をどのように見るかである。今までと同じ視点で見れば変化があると言えるのだろうが、これからの学力を真の意味で「生きて働く学力」として捉えた場合は学力に対する評価基準も変わっていくことにはならなければならないだろう。

(3) 学習指導の形態

従来から行われてきた教科の学習指導では、まず、教師サイドによる各教科や単元の目標やねらいが前面に押し出され、次に内容が設定され、それに適合する教材が準備され、方法についても学問体系に則した効率のよいやり方を一方的に行わせるという、いわゆる目標・内容が過度に重視され、方法・自己実現が軽視される詰め込み型の学習形態が多く取られてきた。これらの方法の問題点は内容知としては大きく期待できるが、自分の課題を設定し、解決していく力、それを応用していく力を十分に育成することができなかったと思われる。その点、この総合的な学習の時間は目標・内容は一人一人にあり、最も重視されなければならないのは個々の子供の自己実現であり、方法（学び方）の獲得が重視されるというものである。また、学習課題の解決学習においては、自分で課題を設定する力、解決していく力、それを応用していく力としての生きて働く学力が身に付き、方法知としてねらいを達成することができる。そのためには、教科指導においては各教科の本質を踏まえながら、目標・内容・方法が適宜指導過程の中で十分に行われることが重要である。

4. 総合的な学習の時間

(1) 総合的な学習の時間の活動構想

総合的な学習の時間には二つの「ねらい」がある。①自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。つまり、学習態度の形成過程を通して「自己実現」を目指すこと、②学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること、③これらのことは課題追求のプロセスで身に付ける資質

や能力の一つであり、学び方の習得であることが挙げられている。これまでの学習は知識の習得に偏っていたため、その反省の上に立って、学習を自らが創造していくことが提言されている。

また、総合的な学習の時間を推進していくためには学習プロセスの構想とした3つの原則を前提にしなければならない。①課題発見の過程がある。これは子どもが学習課題を見つける。教師は子どもが自己課題を発見したのだから、どのようなことに興味や関心を持ったかに関心を持ち、大切にすること。総合的な学習は課題性と子供の主体性の統合をどう図るかが重要である。②課題解決は課題解決のための計画を立て、調べる対象を明確にする。地域の実態に応じて取り組みを変える。③成果発表では課題解決の成果を次の学習につなぐ。このことは自己評価の機会を得ることになる。この3つの原則を基本に据えながら各教科とは全く異なった発想で、総合的な学習の時間の学習活動を構想していかなければならない。

(2) 総合的な学習への期待と学校格差

総合的な学習の時間の取り組みには学校間で格差が生じてくる。それは、総合的な学習の時間に対する認識が教師自身にどれだけ深く理解されているかということに関わってくる。総合的な学習の時間が新しい学習の在り方として創設された意義は感じてはいても、それが抽象的であったり、具体的なイメージが掴めていない状況であれば、実際にどのように取り組めばよいか分らず、実践に踏み込めない。この点、特別活動は学校現場における実践の実績が歴史的にあり、その趣旨が理解されており、それ程の抵抗感はないようである。総合的な学習の時間は教科書を使用しない。この点も特別活動とは同じであるが、特別活動は従来から、児童・生徒を中心に置きながらカリキュラムの編成が行われ、実践されてきた経緯もあり、教師自身にある程度の見通しがあり実践が行われているが、総合的な学習の時間は指導体験がないため、不安を抱いている。特別活動の時間における児童会・生徒会行事は基本的には児童・生徒

を出発点としてカリキュラムを編成しているので、児童・生徒にとって興味を持てる学習活動である。その点では、総合的な学習の時間も同じ立場に立っているため、その考え方を基本に据えて実践を積み重ねていけば、取り組みが容易であると考えられる。しかし、しばらくの間は、総合的な学習の時間に対する実施上の問題点もあり、学校によって格差が生じるだろうし、学校の取り組みによって、子どもに形成できる資質・能力が異なってくる可能性がある。いずれにしても、総合的な学習の時間に対する新しさの認識がどれだけ指導者である教職員に徹底できるかにかかっている。そのためには、学校内における研修組織を確立し、活性化していく必要がある。教育現場の特性を生かして理論研究と実践研究の繰り返しを行って、組織成員のすべてにおいて認識の高揚を図らなければならない。

(3) 系統学習の課題

「総合的な学習の時間」の特徴は児童・生徒が自らの力で課題を設定し、課題解決に向かっていくという過程をとるが、このことについて、戦後のまもない時期に行われた経験主義に基づく学習指導過程は「徘徊する経験主義」と言われた。それは、課題解決学習は調べれば学習はこれで修了であったからである。今回もそのことが再び言われているが、しかし、今回の学習指導過程は各教科で学んだ知識・技能・態度の基礎・基本を活用しながら、学習が進められていく。系統は課題解決の学習経験を問題にする。「総合的な学習の時間」の系統性について問題性を指摘しているが、まず、教科とは本質的に異なっていることを認識しなければならない。言うまでもなく、教科は学問体系としての連続的な系統性を重視しなければ学習は展開できない。例えば算数では、ものの個数→順序→加法・減法ができる→乗法・除法ができる→小数・分数→重さ・時間の概念→十進位取り→面積・体積などと指導に系統性がある。しかし、「総合的な学習の時間」の子供たちの取り組みとして、例えば「国際理解」、「情報」、「環境」、「福祉・健康」など、学習にはそれ程順序性はない。子どもが興味・関心に趣き、

身近かに感じたものから取り組んでいっても大きな支障はきたさない。この「総合的な学習の時間」では課題発見の過程、解決の過程、獲得したものの活用過程など、学習の回数を重ねることによって、活動に深さや広がりが増え、スパイラル的に形成されていくことが重要である。そこに系統性を求めたいと考えている。そのことから、学問体系としての系統性が保たれないとか、児童・生徒の設定した課題であるので、学習内容に高まりが期待出来ないということにはならないだろう。

従来型の学習活動は知識を獲得することが学習活動そのものの「ねらい」であった。今回示された「総合的な学習の時間」はその獲得した知識の「何を」、「どこで」、「どのような形」で活用するかである。ここに示されたように「総合的な学習の時間」は調べて分かった事柄を、自分を取り巻く家庭や社会生活にどの様に生かすかである。テーマによって、活用される方向は異なってくるものであるが、要はインプットされた知識がどこかでアウトプットされた時に初めて、家庭生活や社会生活で生かされる生きた学力となると考えられる。

5. 特別活動

(1) 特別活動の目標と基礎・基本

特別活動の時間における学習の目標は、学習指導要領において「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を活かす能力を養う」⁽⁹⁾である。

最近の子供たちの生活様式も、社会の変化と同時に、大きく様変わりをしている。家庭や地域においてあまり人と交わる機会がなく、人間関係が希薄になっており、問題行動を引き起こす原因の一つにもなっている。それだけに、学校における人との触れ合いを多く持つことが出来る特別活動の時間等で、豊かな人間性や社会性を身に付けることが重要になってくる。特別活動の時間は集団活動を通して行う時間であるから協働的体験の場と

して、思いやりや協調性を多く身に付けることができる時間である。

総合的な学習の時間は、各自が作り出した学習課題を、学習者仲間と協同で探求していくという活動である。その点において、総合的な学習の時間は特別活動と同じ理念を持ったものであると捉えることができる。

特別活動の領域は、学級活動、児童会・生徒会活動、クラブ活動、学校行事であるが、それぞれの持っている教育的機能を達成するために、総合的な学習の時間とリンクさせながら、効果的に展開されなければならない。また、特別活動のねらいは、①学校生活の向上やよりよい生活を目指し、身のまわりの諸問題に関心をもち、友達と協力して望ましい行動をしようとする（関心・意欲・態度）②集団における自己の役割を考え、身の回りの諸問題の解決を目指して判断している、（思考・判断）③話合いや集会など友達と活動する過程において、自分の考えを的確に発表したり、集団活動を進めるために必要な技能を身に付けている、（技能・表現）④生活や学習への適応、健康で安全な生活、集団活動の進め方などに関する基礎的な事項を理解している（知識・理解）であり、総合的な学習の時間のねらいについても同じ考え方に立ってカリキュラムを編成することが重要になってくる。

「総合的な学習の時間」の学習の方法の一つに、「問題解決学習」の方法が採られている。この中で、②の項目は児童・生徒が自らが学習課題を発見し、自らの力で解決していく方法を決定し、解決する活動に進む方向と同じである。したがって、この点を留意事項として特別活動における基礎的学習の在り方として考えておく必要がある。

特別活動の時間については、全教師が共通した理解を持っておくことが重要である。指導を行う場合、コミュニケーションの在り方を中心に置きながら、組織成員の一人一人が所属感・連帯感を深めていくための配慮が必要になってくる。

(2) 学級活動のねらい

学級活動のねらいは、小学校学習指導要領

解説に次のように示されている。「児童が自分たちの学級や学校の生活の充実と向上を目指して、学級内の組織づくりや仕事の分担処理、解決方法について話し合う活動など、学級生活に関する諸問題の解決を自主的に行うとともに、生活や学習への適応や健康や安全な生活など心身の健康を増進し、健全な生活態度を身に付ける活動を通して、集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。」⁽⁴⁾その中で、「学級内の組織づくりや仕事の分担処理」「学級生活に関する諸問題の解決を自主的に行う」「生活や学習への適応、健全な生活態度」などのねらいは、総合的な学習の時間においても同じことであり、特別活動との関連を示したものであると解釈できる。

また、児童・生徒の活動の体験の積み重ねは、学級の組織成員としての集団帰属感や一員であることの自覚を大きく認識するものであり、学級生活の充実と向上を目指した問題解決能力もまた、総合的な学習の時間のねらいの一つでもあり、自己の特性を生かして主体的に生活や学習に取り組む態度など、基礎・基本を身に付けていくことができる。

(3) 各内容の指導と基礎・基本

今回示された学習指導要領は教育内容の厳選と基礎・基本の徹底という観点から改善が図られて行われた。その中で、特別活動においても児童・生徒が各内容の活動を通して基礎的な事項や技能等を身に付けるように示されている。特に今回は、総合的な学習の時間に照らして、カリキュラムを編成する時、各内容ごとの基礎的・基本的な事項を対比させておく必要がある。指導計画の作成にあたっては、各内容ごとに目標に照らしつつ基礎的な指導事項を位置付け、「生活に生きる力」「実践的な力」となるような具体的な事項を明確にすることが大切である。次に、学級活動や児童会・生徒会活動など、児童・生徒が自発的、自治的に体験的・実践的に習得することができるようにしていかなければならない。さらに、特別活動の時間に身に付けた学力は総合的な学習の時間でもまた、その

逆の場合においても応用できる力となるような学習活動を位置付けなければならない。児童・生徒が活動した方法を評価し、これからの指導に生かすことが重要である。

教育課程審議会は学級活動における具体的な改善として、「児童・生徒が主体的に活動することができるようにするために、「児童・生徒が自らよりよい学級や学校生活を目指して諸問題の解決に取り組む活動を重視する」と答申した。特別活動の実施状況調査では、自治的な活動を挙げ、次のように指導の重点化を図っている。

①学級や学校における生活上の諸問題の解決、学級内の組織づくりや仕事の分担処理などに関する学級や学校の生活の充実と向上に関すること。

②希望や目標をもって生きる態度の形成、基本的な生活習慣の形成、望ましい人間関係の育成、学校図書館の利用、心身共に健康で安全な生活態度の形成、学校給食と望ましい食習慣の形成など、日常の生活や学習への適応及び健康や安全に関すること。

そのことにより、児童・生徒自身が学級集団の一員として自覚をもち、自ら学級や学校生活の充実と向上を目指して、協力し合って問題解決に取り組む実践的な態度を育てることや学級活動の指導内容を精選・工夫すると共に、日ごろから学級経営の充実に努めることなどが、学級活動を充実させるためには重要なことになってくる。

6. 学級活動の基本構想

(1) 学級活動で身に付ける基礎・基本

①学級の一員としての自覚と実践的な態度などに関すること。

児童・生徒が学級集団の一員としての自覚を深めることができるようになるためには、学級活動において、活動を重視する意味から学級内の組織づくりに関わる事項を重視している。学級生活の在り方を考える上で、学級内の諸問題を分析し、解決するには、児童・生徒が自分たちの力で話しをしたり、学級の仕事を自主的に進めるための組織をつくる活動を仕組まなければならない。児童・生徒が学級成員の一人一人として進んで役割を受け

もち、その仕事を自分なりに果たそうとする態度や能力を身に付けなければならない。それが共に協力し合って生きる実践的な力になると考えられる。

②学級生活の充実と向上を目指す問題解決能力の育成などに関すること。

児童・生徒が自分たちの学級生活をよりよくするために常に学級の問題について考え、児童・生徒自ら気付くようにする指導・援助が問題解決の能力を養うことになり、このことが総合的な学習の時間のねらいともリンクする。また、実際に学級の問題を解決するにあたっては児童・生徒が集団生活の基本である社会生活上に必要な基本的なルールやマナーを身に付けることが大切である。お互いが自己の良さを発揮し、認め合う中で好ましい人間関係がつかれるようになることが、学級活動の目標でもある。児童・生徒の具体的な活動としては、学級の諸係を組織し、係の活動内容について検討し、日々の実践に創意・工夫を加えながら、好ましい人間関係を築きつつ、協力し合って学級生活を楽しくする向上心を養う体験的な活動を行うことが大切である。

③希望や目標をもち自己を生かして主体的に生活や学習に取り組む態度などに関すること

今回の改訂では「希望や目標をもって生きる態度の形成」が示され、意欲的な学習態度を形成することが重視された。これは、教科の指導をはじめ、総合的な学習の時間と特別活動を関連づけながら、指導内容の在り方について検討することを提言しているといえよう。また、児童・生徒が日常の生活を営んでいく時、目標に向かって主体的に生きる態度を育成することが重要である。このことは、生徒指導の領域や進路指導の領域と重なるものであり、今回の改訂のねらいの中で、豊かな人間性や社会性、国際性などを育成するためには、現実生活の中で目標を抱き、自らその実現に努める態度を育成することが必要であることと重なり合うところである。

(2) 学級集団の形成

児童・生徒が自己実現を図るためには学習活動において、基礎・基本を確実に身に付け、

学級活動の特質である児童・生徒の主体性を重視した指導展開が重要になってくる。その中で、①組織づくりをベースにおいて学級経営にあたる。児童・生徒の生活の基盤は教室という空間に存在しており、その教室は児童・生徒一人一人が活躍できる場である。その居場所を保障するためには組織づくりに力点をおく必要がある。学級の組織づくりにおいては、児童・生徒一人一人が適材適所について活動できるように条件を整備しなければならない。それによって、学級集団の一員としての役割を自覚することができる。また、その時、すべての児童・生徒に対して、リーダーシップを発揮できるような機会を設定しなければならない。係活動の組織づくりは、班単位で係を受け持つという方法と児童・生徒の希望調査によって組織を編成するという方法がある。いずれにしても、児童・生徒自身の力で楽しい学級を作り上げていくという意欲や実践力が必要である。教室の中での学級生活を通して児童・生徒は、当番制（日直など）と係活動（学習係など）の活動のねらいを十分に理解させ、学級組織の機能化を図ることができるように構築していかなければならない。それによって、児童・生徒は、学級集団の一員としての自覚を深め、学級への帰属感を一層高めることができると考えられる。

(3) 係の活動についての理解

総合的な学習の時間における課題解決の活動は、児童・生徒自らが設定した課題の共通部分を共有化し、グループを編成する。一方、学級経営において、学級の組織の編成を行う時、総合的な学習の時間と同様の考え方に立つことができる。全員が役割を遂行できるようにしなければ、決して活動の効果を高めることはできない。そのためには、児童・生徒一人一人が役割を分担し、活動できるような場の設定が重要になってくる。また、児童・生徒一人一人の役割を明らかにした上で、仕事を遂行できる能力を培うことが大切である。各学級では、児童・生徒が学級の係の活動の活性化を図るために、活動の在り方についての創意・工夫が重要な要件となり、児童

・生徒、自らが活動計画を立てて活動に入ることができるように教師が適切な指導をすることが重要になる。その点は総合的な学習の時間も同じである。

7. 特別活動と総合的な学習の関連

(1) 総合的な学習の時間の展開

前述したように、総合的な学習の時間は児童・生徒の生活体験の中から、学習課題を見つけ出すことを学習活動のスタートとしているが、この児童・生徒の課題発見をどう導くかが最初の援助となる。また、この課題は学校が設定した「学校課題」を児童・生徒が設定した「自己課題」にどう発展させるかが重要なカギとなるが、それには学校の課題に基づく「出会いの場」をつくり、教師のアドバイスによって自己課題を決める前に体験活動をさせておく必要がある。本来、児童・生徒の興味・感心は個々によって異なっており、学校の教育目標にのせることは容易なことではない。

次に課題追究活動をどう進めたらよいのだろうか。総合的な学習の時間は児童・生徒が自ら設定した学習課題の解決に向けて、教室という空間に留まらず、地域社会に飛び出して学習活動を行う。その場合、地域の人にインタビューするためのアポイントも児童・生徒が行う。そのために、地域の中の自分の存在を認識することが重要になってくる。児童・生徒は課題解決のための教材に出会った時、①自分の思いをファイルに書き込む、②やりたい課題を試行錯誤で書き込む、③必要な情報や資料を収集しファイルする、④地域の人へのインタビューをメモする、⑤発表の時に活用出来るように整理をしながらメモをとるなどの課題解決活動に入る。

さらに、成果のまとめについては自己課題に必要な資料を整理し、得られたデータの活用の仕方を熟考する。発表に当っては発表をどの様な方法で行うかを検討する。また、発表に際しては課題解決の活動の時に作成したファイルを活用する。発表活動はグループの課題の違いによって結論が異なるので、お互いの結論を交流する。そのような活動過程から、さらに新たな課題が生まれ、児童・生

徒の活動が次々に発展する。児童・生徒たちが学習活動によって得た結果を全校・保護者・市役所その他の関係機関に報告し呼び掛ける機会をつくれば、学習活動そのものに意義が現れてくる。

(2) 学校行事と総合的な学習の時間の関連
特別活動の時間における学校行事は、総合的な学習の時間の活動のねらいと重なる部分が極めて多い。例えば、「福祉・健康」の内容は、ボランティア活動と関連している。今回の教育課程審議会の中間のまとめや答申の中の学校行事について、次のように改善が図られているのでそれを見てみたい。

① ボランティア精神を養う活動を充実する観点から、勤労の尊さや生産の喜びを体得するとともに、ボランティア活動など社会奉仕の精神を涵養する体験が得られるような活動を行うこと⁽⁶⁾となっているが、このことは前述したように、総合的な学習の時間の学習内容の事例として示している、「国際理解」「環境」「福祉・健康」「情報」の中の「福祉・健康」に大きく関係している。総合的な学習の時間が教科や教育活動の他の領域を超えた、いわゆる横断的な取り扱いを行う場合、学校行事と総合的な学習の時間を関連づけながら、学習活動を展開していかなければならない。

② 幼児、高齢者、障害のある人々などとの触れ合い、自然体験や社会体験などを充実すること⁽⁶⁾とあるが、この視点も「福祉・健康」に大きく関係している。また、自然体験や社会体験の場面では「環境」や「国際理解」とも関連があり、相互に働きかけ合いながら、学習活動を展開していかなければならない。

③ 各学校が取り上げる活動については、学校や地域の実態に応じて重点化するとともに工夫して精選して実施すること⁽⁷⁾とある。これは、総合的な学習の時間がこれまで、学習の場を教室という空間から飛び出して、教室外、つまり、地域社会にまでその範囲を広げ、しかも、指導者もこれまで、学校の教師と限定していたものから、広い視野に立って、ゲスト・ティーチャー（GT）による新しい指導形態の方法も実践されていることから、地域

の実態に応じて重点化し、工夫するという観点と重なり合うことになる。

最近の児童・生徒は原体験が不足しているといわれている。中でも自然の中で生活をする機会がなく、社会の中での生活の状況も大きく様変わりをしている。したがって、自然との融和ができず、環境の変化に対応しきれずにおり、コミュニケーションが不足し、円満な人間関係がうまく取れない状況をつくっている。社会体験や自然体験などの現状から、「生きる力」としての豊かな人間性や社会性の育成を図るために、学校行事における学習活動を重視している。このことは総合的な学習の時間における学習活動の推進を考慮する時の観点の一つになると言える。

(3) 学校行事の目的と総合的な学習の時間
学校によって学校行事や児童会行事・生徒会行事の取り扱いは異なるが、文化祭（学芸会・学習発表会）や体育祭（運動会・体育会）や修学旅行（宿泊訓練・ふれあい学級）は総合的な学習の時間との関係が最も強い領域であると言える。学校行事のねらいは、学習指導要領の解説に、「全校または学年という大きな集団の中で、児童の積極的な参加による体験的な活動を行うことによって、学校集団への所属感を深め、日常の学習成果の総合的な発展を図って、学校生活の充実と発展に資するようにするとともに、集団行動における望ましい態度や協力してよりよい学校生活を築こうとする態度を育てる。」と示されている。この中で、「全校又は学年いう大きな集団」「体験的な活動」「学校生活に秩序と変化を与え」「日常の学習成果総合的な発展」などは、総合的な学習の時間の学習活動において順に、自己が設定した学習課題による研究班の編成やその集団、学習課題に対する探究活動、探究活動の方法知について学習を深め、研究課題の成果の発表に対応して考えることができる。

学校行事や総合的な学習の時間のねらいに沿った体験を積み重ねることによって、児童・生徒は、全校又は学年及び研究班という集団への所属感を持ちながら体験することによって得られる豊かな心情や日常の学習の成果を総合的に発展させる態度などが身に付くこ

とになる。

8. 特別活動における学習活動

(1) 学校行事における教育的意義

児童・生徒はほとんどに時間、教室で学校生活を過ごし、生活体験をする。学級の中での友人関係は範囲が限られている。そこで、体育祭や文化祭を縦割りしたブロックで構成すれば、広く友人と接する機会が増えることになる。また、総合的な学習の時間は基本的には学級単位の中の学習課題別の構成によるが、学校の規模によっては学年全体での取り組みも実施されている。さらに、「健康安全・体育的行事」や「宿泊を伴った行事」を伴った行事は学年行事で取り込まれる。例えば、K市のS中学校は外国への修学旅行を実施している。これは、総合的な学習の時間における「国際理解」教育の一貫で行われているが、修学旅行の際に訪問した当地の中学校と交流が深められ、後日、冬休みを利用して来日した中学校の生徒たちとの交流を深める行事があった。K市のS中学校へ70人の中学生が訪れ、歓迎会としての行事の中で、日本の伝統的遊びを知ってもらおうと一緒に独楽回しを行った。また、サッカーなどを一緒に楽しんだ。S中学校の校長は、「外国との交流を通じて国際的な感覚を身に付け、世界にはばたく国際人になってほしい」⁶⁾と話している。このように、学校行事は集団が大きくなればなるほど、学習するスペースが広くなればなるほど、様々な学校行事の活動体験を繰り返すことによって、児童・生徒は全校又は学年という大きな集団を通して活動の仕方を学ぶことができ、併せて国際感覚も身に付けることになる。

学校行事では、児童・生徒が大きな集団の中で喜びや苦勞を分かち合いながら、互いに協力して活動することによって、学級の規模を越えた所属感、一体感が深められ規律、協同、責任、思いやりなどの集団行動における望ましい態度が養われることになる。

(2) 体験によって得られる豊かな心情

学校行事による「儀式的行事」は、日常生活様式とは異なったものとして取り扱われる。入学式や卒業式は、児童・生徒に新鮮な

意欲や勇気や感動を与えるよい場面である。共に学び合った友人たちが励まし合ったり喜び合ったりする場面である。また、そのような活動をしてきたことの振り返りの場である。ここでは新しい生活への希望や意欲を持つことができ、社会生活に対する準備の気持ちを持たせ、規律や社会規範の存在を意識することによって、豊かな心情を育てることができる。また、遠足や生活訓練（林間学校・ふれあい学級）などは、日常の生活とは異なった生活環境の中で自然や文化などに親しむ学習活動を展開することができる。例えば、総合的な学習の時間に探求活動をし、解決できた時の感動と同じ体験をすることができる。このことによって、児童・生徒は感動を味わい心情を一層豊かなものとしていくことができる。

(3) 学習の成果を総合的に発展させる

学校行事で得られた学習の成果は、学校生活の充実と発展につながり、文化祭などの学芸的行事は日常の学習活動や総合的な学習の時間の成果を生かし、学習への意欲を一層高める基礎にもなる。また、体育祭などの健康安全・体育的行事などでは、集団の団結力や日常生活での心身の健康の保持増進への関心、運動に対する興味や関心を誘起させ、スポーツに取り組む姿勢を養うことができる。生活訓練等による遠足・集団宿泊的行事においても、児童・生徒は、校外の豊かな自然や文化に触れる体験を行うことができる。例えば、K市のA中学校では夏休みにオーバーナイト・ウォーキング（夜間歩行遠足）を実施した。その中の一つに、行程の途中に町の施設であるプラネタリウムを尋ね、天体望遠鏡を使って観察する活動を仕組んだ。また、この中学校では総合的な学習の時間に課題学習として、「天体の不思議」を設定し、天体に関する専門書や理科図鑑などによる文献研究を行っている。行事を実施した後生徒は、「図鑑の写真で星座を見て学習したが、実際に夜空に輝く星座を観察できて感動した。これが本物であるということを実感した」と感想を述べている。このように、特別活動と総合的な学習の時間を関連付けてカリキュラム

を編成すれば、自然や文化に触れる体験ができ、さらに、特別活動の本来のねらいである、校外における教師と児童・生徒、児童・生徒相互の触れ合いの集団による活動体験をすることができる。

教育課程審議会答申の改善点の中で、勤労生産・奉仕的行事が重視されているが、これについても同じことが言える。日常の教科学習や総合的な学習の時間に活動した「福祉・健康」に関わる内容と連携している。学習することによって勤労生産意欲や社会に奉仕するボランティア精神などが、養われることになる。また、このような活動は、児童・生徒にとって、勤労の価値や必要性を感じ取り、自ら進んで他に奉仕する態度が養われていくことになる。

9. 学習の取り組みとしての評価

今回示された、総合的な学習の時間については教科のようないわゆる通知表的な評価は行わないとしているが、児童・生徒の学習に対する取り組みの過程である計画・実践・評価は一連の活動の過程として取り組んでいかなければならない。例えば、体育祭という行事を、「生徒会行事」として位置付けるところからスタートさせる。生徒会行事であるから、委員会活動としての取り組みが始まる。まず、体育祭のテーマについて話し合いを行う。目的を設定し、テーマに則って、種目の検討が行われる。練習の取り組みについてはできる限り、総合的な学習の時間に活動した内容が活かされる形で展開される。体育祭当日を迎えるまでの途中は、各ブロックの取り組みの様子がどのような状態であったかという観点で評価され、プロセス点が付けられる。それに対して、教師は行事を「授業化」する。この時の授業化とは、文化祭という行事に対する学習目標、指導観、生徒の実態把握、教材の準備と指導上の留意点、指導展開を内容とする「体育祭学習指導案」を作成することを指している。この体育祭ようなプロセス点にみられるような評価が児童・生徒の学習活動に対する活性化という点で大きく左右されることになる。それが最近、注目を集めているポートフォリオ学習である。これま

での評価は児童・生徒が学習し、教師が評価するというパターンであったが、この評価は児童・生徒が学習し、自分が評価するまたは、児童・生徒が学習し、児童・生徒が評価するという特徴を持っている。また、ポートフォリオ学習活動は情報収集に多様に活用できることから、「評価」に限定せずに「ポートフォリオ学習」としても活用する。特別活動における児童会・生徒会行事はそれぞれの行事を担当する委員会自身が評価したりする場面を設定すれば、この「ポートフォリオ学習」を活用することができる。

10. 総合的な学習の時間の実践上の課題

現在、総合的な学習の時間が実施されているが、実施に当って、教育現場では様々な課題が出てきている。総合的な学習の時間についてのカリキュラムが学校に任されているため、何をどのようにしていったらよいか分からず、教師に困惑がみられるが、教師が学習指導に主体性を持ち積極的に関わっていかんとする姿勢を研修会などを通して養っていかなければならない。学習課題は児童・生徒が設定することを基本にしているが、児童・生徒が設定した課題でよいのかどうか不安を持っている。生徒まかせになると知識や活動の系統性が保たれないこともあるので、教師としては計画性をもって児童・生徒に課題設定の方向性を援助していく必要があるだろう。また、児童・生徒が学習課題を設定するので、カリキュラムが作りにくいと思っている教師もいるが、これも、教師としては事前に児童・生徒の活動を想定して、準備をしておかなければならないだろう。また、総合的な学習の時間は児童・生徒たちが個別に学習活動を行うので、それにどう対応したらよいか分からない。これらの不安・疑問を解決するためには教師間のコミュニケーションにより共通認識を持し、教師間の相互理解・相互援助を高める手立てを考えていかなければならないだろう。また、評価も個別にしかもプロセスに応じて行わなければならないので、総合的な学習の時間の評価に自信がないと感じている教師も多い。さらに、総合的な学習の時間は、教室を出て、地域で学習することも

あるが、校外に出た時の安全面が心配であると感じている。これからの学校教育は学校が地域の文化センターとしての役目を果たし、地域の人々の理解や協力を得ながら、地域との連携の基で教育の推進に当たっていかねなければならない。また、「総合的な学習の時間」は個性を重視している。したがって、課題の設定にあたっては児童・生徒の数だけテーマも設定される。これらの現場での不安や悩みを解決していくためには、教師が学習活動の援助者として、テーマに関する調査などを実施することにより、教師自身が事前に児童・生徒の学習活動に関わる時間や場所を設定し、「総合的な学習の時間」に限らず個々の実態に即した指導の手立てが必要である。そこがこの学習活動を生徒任せにしないことであり、援助者としての役目でもある。総合的な学習の時間に対する期待は大きい、課題もいくらかある。また、教師の意識の違いや入学試験に関わることや小学校での外国語の取り組みなどに学校間格差が生じている。それをどう考え、どのように適切に総合的な学習の時間として組み立てるかがこれからの教育課程の自主編成を任されている学校の責任者としての管理職の力量に関わってくることになる。

11. まとめ

今日の学校教育は様々な課題を抱え込んでいる。これらの課題の発生の要因には諸々のことが考えられる。以前の教育は学校と家庭と地域社会とがそれぞれ役割を分担し、機能していた。つまり、学校は子供たちの望ましい社会人となるべく徳性を人格の形成に求め、健全な心身をつくり上げ、さらに、知識と文化の伝承を効率よく機能させればよかった。しかし、現代の学校は一言で言えば何もかも学校が一手に抱え込んでしまっている所といった感がある。学習者である子供たちは勿論のこと、特に若い教師たちにもみられる原体験の不足は、目の前にいる子供たちの問題発生の兆候を洞察できなかつたり、その対応に困惑しているのが現状である。今回示された新学習指導要領、とりわけ「総合的な学習の時間」はそうした、教師を含めた子供た

ちの成育や生活体験の変化から発生した問題を解決していく力、つまり「生きる力」を育成していくための学習として最も重要な役割を担うものとなるだろう。そのためには特別活動における学校行事や児童会・生徒会行事と総合的な学習の時間との関連を図ったカリキュラムの構成が重要な要因となる。本論文は新学習指導要領の告示に伴い、目玉商品である「総合的な学習の時間」に焦点をあてながら特別活動の在り方を考えてきた。改訂の趣旨である教育課程の横断的、弾力的運用はこの「総合的な学習の時間」のみに限られたものではない。これからの教育課程経営にあたっては、主体的に受け止め、決して人任せになったり、特に“管理職がする仕事だ”と押しつけることなく、「総合的な学習の時間」を主体的、自律的に受け止め望ましい特別活動が展開されなければならない。教育課程の主体的な編成はこれからの教育現場での最重要課題と受け止め、学校独自の主体的な創造による教育課程の編成が一人一人に与えられた課題であると受け止めなければならない。

また、このような教育課程経営を考えた時、各学校が主体性、自律性をもって文化を創造していくためにはその牽引車となるのは言うまでもなく校長である。校長が如何に文化形成の最要因である構成員に対して、意識の変革に迫ることができるかは、まさに指導者としての力量そのものが問われていることにつながってくる。今まで以上に校長のリーダーシップが求められることになる。

【引用文献】

- (1) 中留武昭編著『総合的な学習の時間－カリキュラムマネジメントの創造－』、日本教育総合研究所、2001、38頁。
- (2) 中留武昭編著、前掲書、2001、39頁。
- (3) 文部省『小学校学習指導要領特別活動編』、文部省、1999、8頁。
- (4) 小泉雅彦・稲垣孝章「特別活動－各内容ごとの基礎・基本と学習指導の工夫」、『初等教育資料』、東洋館出版社、2000.9、52-54頁。

- (5)宮川八岐「特別活動の学習指導の改善の視点」、
『初等教育資料』、東洋館出版社、1998.8。
(6)宮川八岐、前掲、1998.8。
(7)宮川八岐、前掲、1998.8。
(8)西日本新聞社『朝刊新聞記事』、西日本新聞社、
2004.11.17付、28面。

【参考文献】

- ・中留武昭編著『総合的な学習－成功のカギ－』、
エイデル研究所、2002。
- ・中留武昭『総合的な学習の時間－カリキュラム
マネジメントの創造－』、日本教育総合研究所、
2001。
- ・中留武昭編著『総合的学習のカリキュラムマネ
ジメントに関する理論的・実証的考察』、平成10
-11年度文部科学省科研報告書、2000。
- ・中留武昭『スクールリーダーのための学校改善
ストラテジー』、東洋館出版社、1991。
- ・児島邦宏編『小学校学習指導要領』、時事通信社、
1999。
- ・文部省編『特色ある教育活動の展開のための実
践事例集：「総合的な学習の時間」の学習活動
の展開：小学校編』、教育出版、1999。
- ・文部省編『特色ある教育活動の展開のための実
践事例集：「総合的な学習の時間」の学習活動
の展開：中学校・高等学校編』、大日本図書、2
000。
- ・高階玲次『学校の特色を生かす総合的学習のマ
ネジメント』、明治図書、2000。
- ・宮川八岐『特別活動の授業』、小学館、2001。
- ・加藤幸次他『中学校の総合的な学習：2002年実
施のためのガイド』、小学館、1999。